健康科学の品格と行動分析学の可能性

鶴　本　明　久
(鶴見大学歯学部予防歯科学講座)

今年も論文を書くという数年来の約束を果たせず、こうしてギリギリの線で深井編集長に手紙を書いています。昨年の文章を読みますと深井先生を相手にものすごい愚痴を語っていますが、今年はさらに惨劇に近い状態となっています。この惨劇の理由は簡単で、学内、学外から次々に飛んでくる矢を受け止めては処理している結果です。一年前は、カオスの中にあり神の見えざる意志のようなものである方向に集約していくというような楽観的な考えを持っていましたが、どうもそうではないようです。私個人にしてみれば、何故こんなに矢が飛んでくるかというと、私に向かって矢を放つヤツがいて、私も同じようにたくさんの矢を誰かに飛ばしているわけです。勿論矢を放つ何らかの必然があって矢を飛ばし続けているのでしょうが、考えなければいけないことは何故こんなに相互に矢を放つような情況に陥っているかということです。単に情報過多とか問題の山積ではないようです。何かのために動くことが問題解決のためではなく、問題を新たに作っているような感じです。この情況は、法則性の連鎖が機能している“複雑系”とか“カオスの淵“とかいうのではないようです。理性的な意志から遠ざかるように外へ外へと向かい、自分が進んでいる方向すら見失っているような気がします。健康の問題も、同じようなジレンマに陥っているのではないでしょうか。

昨年末から今年にかけて起きている経済・社会的犯罪は何を警告しているのでしょうか。記録的大雪は天災ですが、その対応をみるとそこにも社会的混沌がもたらしている歪みを見る思いがします。金権主義や勝ち組合理主義というようなことなのでしょうが、ここではそのような議論はしません。ただ、健康、保健医療そして福祉の問題にも同じような寒い風が吹き始めているような予感がしています。まさか、保健医療にたずさわる者がぼろもうけを企て大事件を起こすというようなことはないと思います。怖いのは、正論として、時には社会正義として「アメリカ型の医療制度」を世界で最も優れた制度であり、今の日本の制度はすぐにでも廃棄すべきである、それがグローバルスタンダードだと強制されることです。医療保健の成果をすべて数量化し、数量化できたものだけが科学であり、計測できないものは科学ではない。そこから生まれた制度が不可侵の法則となり、いつのまにか健康づくりの目的が計測可能な数値の向上になっている。福祉の本来の理念であった「人間の尊厳」はどこかに消えて、統計数値と未来予測という間違わないと信仰されている数式によって福祉制度を次々に変えていく政治。生命神秘の解明と夢の医療の実現を目指していたはずなのに、オリンピック競技の場になっている医学や生命科学。誰が考えても合理的で、高度な治療が可能なアメリカの医療制度、客観的な評価方法によって改善される保健や予防、経済理論に保障された普遍的福祉制度、誰も反対することはできません。この完全性が、どうしても薄ら寒い感情や今日本で起きている社会的事件と結びつくのはかなりひねくれた考えでしょうか。

たぶん“ブレーキ“の甘さを感じるからではな

いでしょうか。良い論理（アメリカの医療制度、客観的数量評価、完璧な経済理論）は、批判を許さない。これまでの保健活動やヘルスプロモーションにおいても、我々は様々な保健モデルや行動モデルによる理論を利用してきましたが、現実や実体が理論に部分的にあてはまることはあっても、理論に実体をあてはめることは不可能であると考えてきました。しかし、今の危うさは現実を理論のとおりにあてはめようとしているのではないでしょうか。理論があまりに素晴らしいから、ブレーキが利かない、現実の悲鳴を無視する。このような無理がいろいろなところで起きているように思います。

そんなことをつらつら考えていましたら、とても愉快な本に出会いました。さっそく映画化されていますが、「博士の愛した数式」（小川洋子著）という本ですが、少し数学が好きな私はメモ用紙と鉛筆を片手に持って久し振りに楽しみながら読みました。この著者が大の阪神タイガースファンというのも重要な要素でしたが、大げさにいえば科学における哲学や取り戻さなくてはいけない教育の本質を語っているように感じたのです。この小説は数学者の藤原正彦氏への取材から創作されたようです。藤原氏のエッセイは好きで4～5冊ほど読んでいましたので、なるほどと感心しておりました。そしたら、今度は藤原氏が「国家の品格」という本を新潮新書から出されました。じつは、このレターの前半に書いた「健康問題の危機」は、私自身かなりミーハーなのでほとんど受け売りになっていました。最近起こっている事の危険性や戸惑いつつも仕方なく走らざるを得ない状況にあることの原因が見えてきた感じでした。歯学教育、歯科保健そして行動科学の研究においてもグローバルスタンダードということで、単純化された理論を使い、2段階程度の論理思考によって解りやすい結論が導き出されている。例えば、日本の歯科医の臨床能力が諸外国と比べて劣っている。それは、歯学教育における臨床実習の不足とその客観的評価が確立されていないからだという解りやすい論理が導かれ、“客観的評価”と“臨床能力”が統合され、それへの対策ということで無数の矢があちこちに飛ばされることになる。そのいくつかの矢を私自身受けることになるわけですが、それはほんの一例です。それにしても「国家の品格」がベストセラーになっていますので、同じように考えた人がたくさんいるということですね。

どうでしょうか、万葉集の時代を考えてみませんか。大和人の健康観、九州人の健康観、東北や沖縄の人の健康観を現地でモニターしてみたい気がしています。フィールドからあまりに遠くへ離れてしまいました。最近では、データが送られてきて、それだけを見て分析や解析を行っています。反省すべきです。そういうことで、先月調査を依頼している長万部に直接行って、解析結果と現場の状況との一致性を確かめるために保健師さんや歯科保健の関係者とディスカッションをしてきました。解析結果の解釈に大変厚みを加えるものでした。それに加えて、御世話になった歯科の先生と町長さんの3人で遅くまで飲んだのですが、データに見え隠れしていたことがよく理解できました。そして何より分析者としての安心感を得ることができました。現実と離れたところから論理を作ってはいけないということでしょうか。藤原氏は、武士道と惻隠の情が国家が品格を保つためのキーワードだと強調していました。我々の健康問題にも共通するように思いました。

最後としてはかなり唐突ですが、「行動分析学」が以上の反省を踏まえて、応用可能な手法かなと思っています。これは、アメリカ型のとても単純な理論を背景にしていますが、単純であるがゆえに理論が飛躍せず、かなりの自由度を持っています。実験的で、実証的なので理論が現実を縛るような制約をしません。日本流にどうでも変化させられる可能性があります。

今年も乱雑な“論理”を展開しました。しかし、年に一度こうして深井編集長に手紙を書くことが楽しみだし、心の整理をさせて頂くチャンスを与えて下さっています。しばらくは右往左往していきます。また、少し私自身にもブレーキをかけて

みたいと思っています。狭くて、美しい日本、そんなに急いでどこへ行くですかね？

【著者連絡先】
〒230-8501　神奈川県横浜市鶴見区鶴見2-1-3
鶴見大学歯学部予防歯科学講座
鶴本明久
Tel：045-580-8375
E-mail：tsurumoto-a@tsurumi-u.ac.jp